

# 研究員の眼

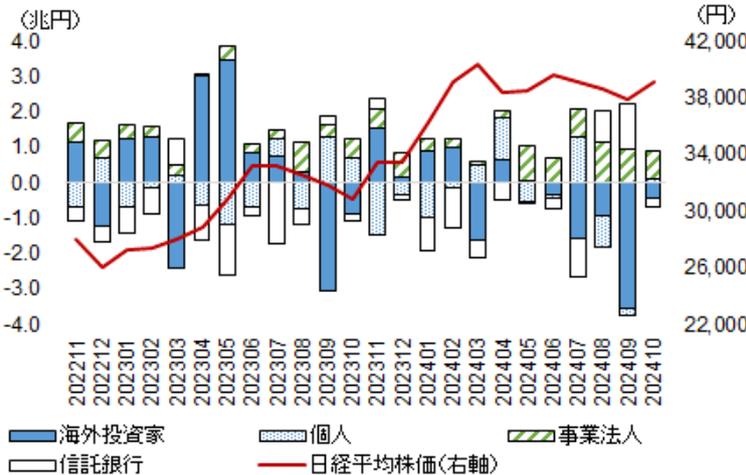
## 投資部門別売買動向(24年10月)

～海外投資家は売り越し～

金融研究部 研究員 森下 千鶴  
 (03)3512-1855 mchizuru@nli-research.co.jp

10月の日経平均株価は、前半は堅調な米経済指標や日本の利上げ観測後退を背景にドル高円安が進行し、指数が上昇した。日経平均株価は9日に3万9,000円を超え、15日には3万9,910円まで上昇した。後半は、オランダの半導体製造装置メーカーASMLの低調な決算を受けて半導体株への懸念が高まったほか、衆議院選挙結果への不安から指数は下落し、25日には3万7,913円と前月末比でマイナス圏に沈む場面もあった。しかし、27日に投開票が行われた衆議院選挙後は、与党の過半数割れが織り込み済みとされ指数は再び上昇に転じ、月末は3万9,081円で終えた。このように日経平均株価が推移するなか、事業法人、個人が買い越す一方で、海外投資家、信託銀行が売り越した(図表1)。

図表1 主な投資部門別売買動向と日経平均株価の推移



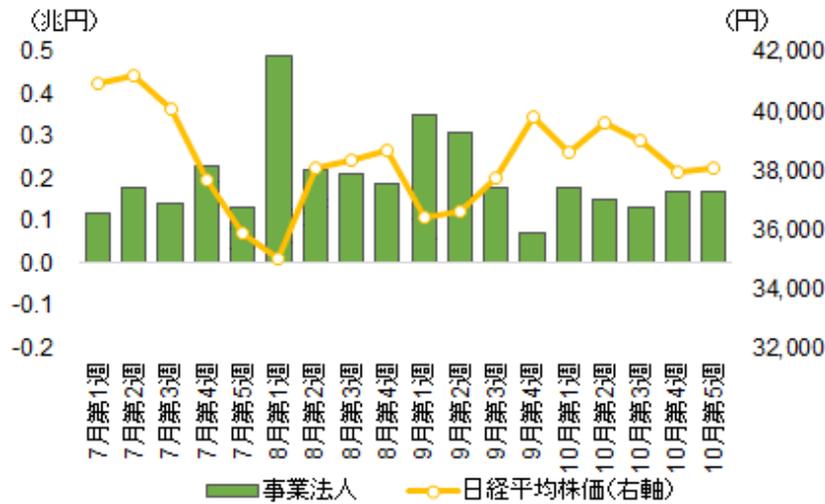
単位: 億円 (億円未満切り捨て)		海外投資家	個人	証券会社	投資信託	事業法人	生保・損保	都銀・地銀等	信託銀行	日経平均株価 (円)
月次	202408	-9,549	-8,652	19	1,163	11,252	-883	-1,046	9,153	38,647.75
	202409	-35,662	-1,815	-300	3,762	9,316	-2,240	-535	12,972	37,919.55
	202410	-4,218	948	-263	2,889	8,293	-1,068	-1,352	-2,714	39,081.25

(注) 現物は東証・名証の二市場、先物は日経 225 先物、日経 225mini、TOPIX 先物、ミニ TOPIX 先物、JPX 日経 400 先物の合計

(資料) ニッセイ基礎研 DB から作成

2024年10月（9月30日～11月1日）の投資部門別の売買動向を見ると、事業法人は現物と先物の合計で8,293億円の買い越しと、最大の買い越し部門であった（図表2）。2024年1月から10月までの自社株買い設定金額（TOPIX構成銘柄）は13兆円を超えた。10月は他の投資部門の売買動向の金額が小さくなるなか、事業法人は継続的に自社株買いを実施し、月を通して指数を下支えしたようだ。

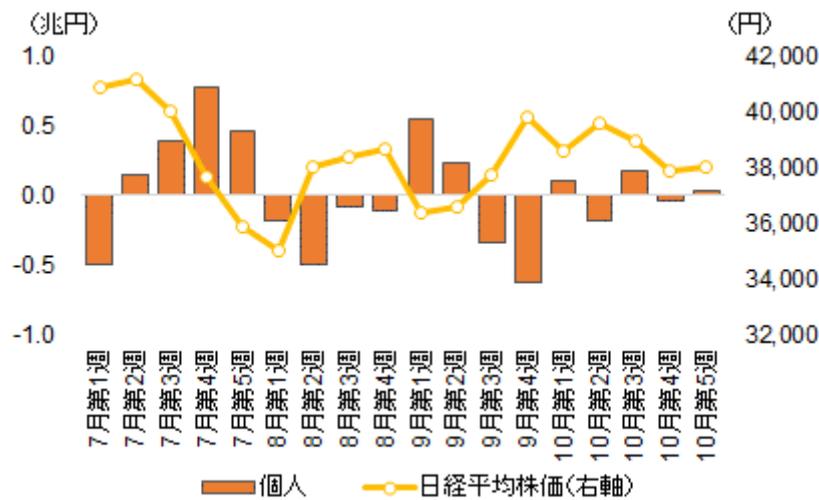
図表2 事業法人は41カ月連続買い越し



(注) 事業法人の現物と先物の合計、週次  
 (資料) ニッセイ基礎研 DB から作成

また、10月は個人も現物と先物の合計で948億円と小幅に買い越した（図表3）。

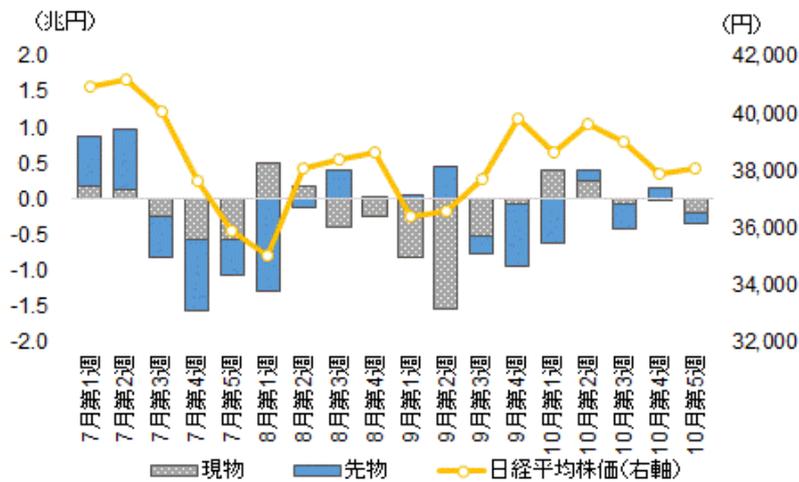
図表3 個人は小幅買い越し



(注) 個人の現物と先物の合計、週次  
 (資料) ニッセイ基礎研 DB から作成

一方、海外投資家は現物と先物の合計で10月に4,218億円の売り越しと、最大の売り越し部門であった(図表4)。内訳を見ると、現物は3,758億円の買い越しであったのに対し、先物は7,976億円の売り越しと先物を中心とした短期投資家の売りが目立った。ただし、現物についても10月第1~2週(9月30日~10月11日)は買い越ししていたが、10月第3~5週(10月15日~11月1日)は小幅ながら3週連続で売り越した。10月には国内で10月27日に投開票が行われた衆議院選挙結果に対する不安が徐々に高まったこともあり、海外投資家は10月中旬以降、積極的にリスクを取りにくい状況であったと思われる。

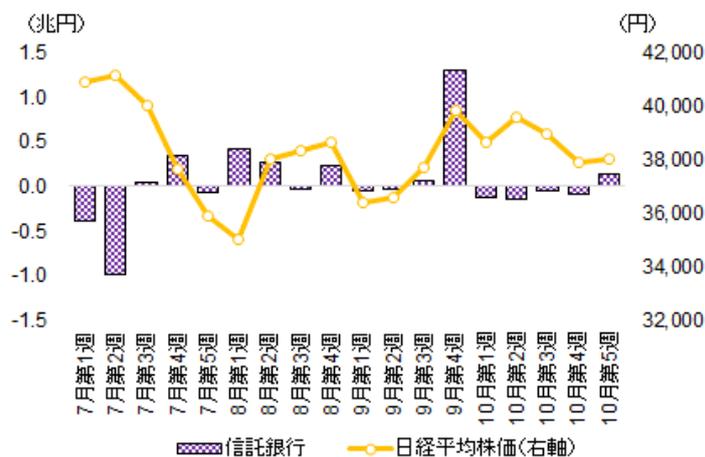
図表4 海外投資家は売り越し



(注) 海外投資家の現物と先物の合計、週次  
(資料) ニッセイ基礎研 DB から作成

また、10月は信託銀行も現物と先物の合計で2,714億円の売り越しだった(図表5)。

図表5 信託銀行も売り越し



(注) 信託銀行の現物と先物の合計、週次  
(資料) ニッセイ基礎研 DB から作成

以上

お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。